椿說弓張月 殘篇 壹

へ13
3908
25

曲亭主人著　全部五編　三拾冊

椿說弓張月殘編

葛飾北齋畫　羣鳳堂　群玉堂梓

13
3908
25

古城高聳白雲叢渺渺江天望不窮山色朦朧環檻外水光瀲灩映牕中遥憐太義千秋隔更歎雄圖一旦空回首不堪頻借問野花寂寞對春風　城頭一望尚巍然往事唏噓獨可憐寒徑空飛霜後鳥荒臺幽鎖雨中烟曾扶社稷聲名重更濟乾坤節義堅若問先朝亡鼎恨從來但有失忠賢

楊文鳳自云城主毛國鼎者先朝之忠義也一旦為讒者被害國鼎亡而不久先朝亦失遇

右琉球楊文鳳中城覽古詩　著作堂主人録

佳奇呂麻
嶋長林太夫

讃岐院の神使
九郎坊
為仲

悲歎雖爲人
生事
寬達難爭造
化權

賤婦十樣

為子芳墳到碧岑
西風颯颯艸森森
可憐夫婦千秋恨
長使遊人泪滿襟

琉球楊經齋吊夫婦墓詩

鎮西八郎為朝外傳椿説弓張月殘編下帙目録

第五十七回　巴麻嶋為朝訪神仙
松山磯嶋長敕夫妻

第五十八回　姑巴嶋父子再會
射飛鳥神童談兵

第五十九回　貝鼾舜天丸趣山北
造舟紀平治出孤島

第六十回　借劒樵夫供婦
集燭山妻留客

第六十一回　決涙為朝瘞窣都婆
穿壁三光刺源按司

第六十二回　天孫廟阿公贄首級
城山中毛鶴張寃家

第六十三回　推因談果解手刀
赦罪認祖落月弓

第六十四回　剪頭髻舜天丸全孝順
刎情人紀平治懲隱慝

第六十五回　撥靈箭舜天丸射曚雲
斬賊將林太夫贈兵粮

第六十六回　夫婦塚兩児誕生
龍宮城三賢逑志

第六十七回

憐苞苴王女示叙　聽童謠為朝決別

第六十八回

中山府舜天即位　祭神奏樂大團圓

員外一條附録

為朝神社并南嶋地名辨畧

統計一十二回殘篇下帙五冊の目録終

全部五編二十八巻六十有八回條目盡于此矣

前編六巻十五回　後編六巻十五回　續編六巻十五回

拾遺五巻十一回　殘編五巻十二回

毎編目次各出於簡端

是書文化乙丑年春月初發硯同庚午夏日全結局

殘編引用舊説崖略

壽星老　即歌曲南嶋志云其曲則有王者國百花國為人臣為人子揚香壽星老上蓬萊等紙糊福禄壽

中山傳信録巻云天妃宮前沼池内作假山作白鶴池上斧大松一株立地中止亦作一白鶴如飛鳴相向狀四圍以紙皮作假山羅草花數十種圍之中作一老人二鹿如山呼祝壽狀此那覇人所設

板舞　中山傳信録巻云女子於歳初有扳舞戲横置板於木椿上兩頭下空二三尺許二女對立板上一起一落就勢躍起五六尺許不傾跌欹側也

多褫國[コクヲ]子益久人[ヤクヒト]即琉球。又作多尼嶋掖玖人見于日本紀。續日本紀。日本後紀。文德實録。三代實録等。

貞賀井嶌[キヨカヰガ]即琉球。又作奇界見于東鑑。

[二十社[ヤシロ]]南嶋志云。宗社之神者。伊勢大神祠自尚金福始。八幡大神自尚泰始。波上之社。洋之社。尸垂那之社。普天間之社。末吉之社。並皆奉祀熊野大神也。其始不詳云。菅神祠。自久米嶋人林氏始。又有一个妃天巽等祠。又浮圖法唯有禪與密之教耳。

此條古實。若有管見。則引用以為闕典。今不遑校

擧臨編自見。

庚午仲春

曲亭陳人鮮再識

鎮西八郎爲朝外傳 椿說弓張月 殘編 卷之一

東都 曲亭主人編次

第五十七回

松山磯に嶋長夫妻を救ふ

巴麻島に為朝神仙を訪ふ

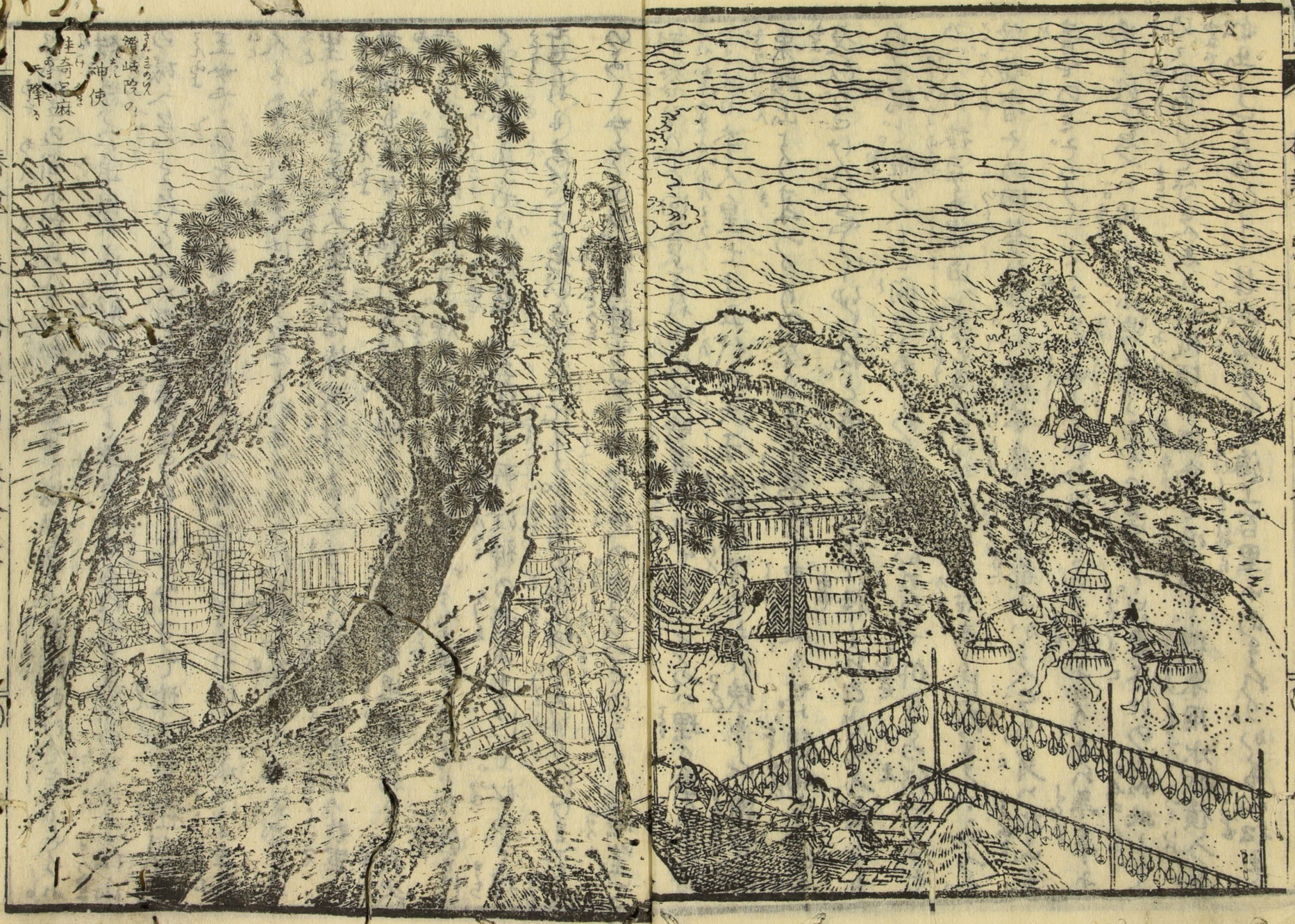
為朝王女ハ昌志頭なる。松山の孤みまして。ゑいといくらう餓飢れ。進退究て立在ふ折うら。蝶雲ク兵ホ駭出まして落人を捕ふ。ゆぶ者の。耳邊よ生ゆ孔ふ。公のこ猛しといへども。力衰へ勢竭て脫ま果てうもゑひあざりしに。誰とハ知らぬ水際よ繫ぬ蘆のうちよりゑ忽然と。一艘の。独木舟ゑ漕よして。為朝夫婦をさし招れ。うくく舟ゑ乘れよといふよ。敵ク。身方ゑ知りあらぬ。事急なるまぶ。問定ゑ及ぶ為朝ハ王女を扶引壁ゑる足ゑ踏運びして。舟ゑ内ゑと

乘りの人ハ紅人艇て漕出ちぬ。その疾こと。礫の氷に走るごとく。主地よ
澳中へ。里ごとり漕ひふりしけり。為朝も王女も。ひとりけまりねば。
彼船人ども。うち對ひ。かゝる危窮の時ハ臨て。ゆくりなくも故旦しん
過世の契あるにこそ。抑何國いかなる人ぞ。名告まくしゆへと宣へば。
紅人ハ忙しく。楫をとめて艇ハ踏躍し。別を告りてより。ちやう七年
になりてのゝハ。面忘れしまふなるべし。これを佳奇呂麻の嶋長ぞ。
林太夫といふりのなる。按司清夫婦の。ちのうちに子困りゝ是
まふるゆゑ。神の告のまよりて。快船ぶうち乘り。おん迎ふまくくし。
そハ長拙潜なれハ。後おこそまうさえ。氣色のいく餓まうと
えゝうてまろ乘ぶ。まゞ齎しなるぬを。進ぶしゆうと信ぶうち。船底
より。飯摠燒魚なんどをとり出。亦紅酒一瓢をりて。まゝ進

ぶれハ夫婦ぞ海月の骨にあふぐうちして嶋人ハ生年とぞ
海蘊飯も百珍の美味ふりやまし只一瓢の村酒も甘露のごく心ひ
たまふるゆゑし為朝かゝゆて盃をあげ。さて王女ハ宣ふ。うこれ嶋
伏ゆて猛火ハ裏れ。咽喉渇きて堪がたさ。駿馬の鮮血を吸ひ
あれ凡馬の肉を食ひしりの。ちやく酒を飲ざれハ。全身悪瘧を
發し。久しうふぶして死をとゝ。いくりぞれ馬肉を食ハざれども。その血を
吸しうハ。今ハ心ハ快かふぶ。ちうぶ。ふあゝに求ぶして。一ヶ日の飢を忘れ
又酒を喫うて馬毒と解をゝハの酒食ハ價千金。真ハ崛山の庁
玉なりいハみる長ぞ誠忠のいくれ所忘るべうふぶ。と宣へば王女を
いうゝ。長ぞ厚ぶ恭を賞嘆し。七年已前佳奇呂麻ハ。ぶし浮世
を潜びつ。長ぞ信ハ今の命を繋ぶ。ぶれば。その面新を忘ハ

かうハわらぬ種なれども。身ハ疲れより事急にて。君もろともつも外らしく。その
人なりけるハ志らざりし情落しと恨ならせそと。真実なるに媚語ありへバ。
林太夫ハ忙しく艇に取りかくさし著。三十六嶋おさむる中に。佳奇呂麻ハ
都へ遠く。人影稀なる荒磯なれバ。再びふたゝび君御夫婦の先途を
救ひ奉る。謀りしさハ嶋夫が訛る言語を発しかぐしさても一時のるを
ありし身の長一丈あまり出して面ハ黒きこと漆のごとくあるかうに鼻のたかさ
そこの櫓杭を。三ツも續さまにやうかて修驗者めきたる旅客。長が
門に来ていふやう。聖有聖のころ為朝王女とかともに睚賊岳に
囲られ。具志頭の東なる松山の磯に到るべし。汝急ぎ船を出し彼処に
赴きてこれを救へといそぎさりけると怪しかりけれバ。吾儕おそれく
汝身ハ原何ほどの人にて。何國より来まひられてらぬ身をあれね

形容なりと回答をされに彼修驗者点頭て志ろさるハ理あまりされハ
是大日本人皇七十五代の天子。崇徳院のおん使にして讃岐國
象頭山より来りつるものなりけり。疑ひて事遅くせバ。後悔さるべきも
及びがさけん。ちやくゆき給と催促をせし怪しむことしげさうも
あらぬ程ど。推かへして問かどもしかりけんともおもひて仰ころにそ
乃ハ八郎接司に縁由と告もする為なれバ。名告もましたまへとらふに。
修驗者その回答ハせで。一濱千鳥。跡ハ都にかよへども。身ハ松山に
音をのミぞなく。と三たび吟じてかき消ごとく失にけり。この平事に
あまりにとして人バ。嶋人ホに告もそろに違ずく。只妻子にのミぬ此よし
のこまありと伝え志らし。俄頃に酒食を准備し。糧米用水が積入て。
船出しけるハゆきしふが。具志頭まで海上百里にあまれりかる小船なれ。


讃岐院の
神使
珍奇を麻へ
天降る

に海道の間に到らんで処のとまりとまりに泊りをかさね。遊帆あげて走らせけるに。
残きなふに追風はよし。船路ゆくことを平日にたぐれてきのふの黄昏に松山
の磯へ着きつれども。日夢のこゝちしけるが。さて按司や在る
王女や在るらんと頭を長くなして岸のかたをみつれども水際に立在
人もあらず。さればかゝることかぎりなかりければ。船を篷の中に隠しおきめ。
里に趣きて。大里の為体案外なからゆくに。長川大里山の敗軍に。
按司も王女も捕はれたまひぬといふもののありげなも嶋袋の兵火
發りて天もとゞろきましく。煙の中に焔のまふさま遠く見渡されて浅まし
くも悲しくて只悵然と立在しが。所詮神の教に任して船に帰り待
ますれはよしと思ひかえして忙しく。舊の水際に立帰りにけれど心
やすくおもはれず。目睡もせであかす夜の岸のかたのみ眺望て

ゆひしに件の異人が教によりて君は夫婦が岸に立在追剝が敵を
うかゞりもの底兆なりけるとえしもあるに。身は松山に寺を守て空え
志に乗違ひ。まんず彼和歌を口吟。こ船漕よして一五一十とりの
かゝれば。為朝これを咎もあへず。その疑ふべくもなく讃岐院の神霊
の吾を救はせたまひし。彼濱衛の三十一字は新院讃岐の松山に在
せしとき手づから五部の大乗経を書写して都へ上らせたまひしを。
誦じ申し。御製あり。しかれども少納言入道信西が阻まうるに依り
よつて朝廷ゆるし玉はず。貪婪ありて彼経巻をそかずに情なくも返
されたり。されば院の御怨み日来にいやまして。天に祈り地に詩り。
魔界に入りて帝の奴をとりおもひしらせんと誓ひ
し名ところ似ざる松山に為朝夫婦が呻吟ふを援しも志

かさん。佳奇呂麻人ふ撓せるふ君恩いとも忍」と弓を投やて数回。東のかゝと拜しるくば王女も感涙禁めめくと良人の後方了額著るくハ林太夫も今之ふ。事著明ゆるこゝちして共ゆ感嘆ちうきゝ當下為朝そ。やゝくに頭を擡去年利勇と洙しゝたれちゞえより。嶋依ゆて曚雲に火攻せられ。馬の腹中に入く。猛火と避ゝうゝと亦王女も大里山の敗軍に。士卒戮辱し。辛ゞく囲ゝと殺脱嶋袋ゆく。夫婦ひとつふゆりゆるはしと物ゝうゝるくハ林太夫をゆく。或い驚ゆ或ゝうち歎き。或ハ歎びて。こゝる是神の擁護ゝいせるゆゝりこそ。末ゝのりゝ忍ひをゆと行ふ。紅ハ亦二三里ゆゝうゝゞしてゝる。為朝かゝるゆて嶋長ふ對ひ。ふの帰帆ハ追風ふゆゝゞ。決何延へゝ船をよせんとゝふと。同るくハ林太夫答て。さハ彼齊せ前面ふ雲のごゝくゝえゝゝハ。姑達佳津奇奴巴麻嶌。伊計嶋といふ四ツの小嶋ふて巴麻嶌。伊計嶋ハ住む人もゝゝゝと今霄そゝらく紅と歇翌の順風をまちてこそ。佳奇呂麻へゆん供つゝゝりゝんといふを為朝去ゝうゝべゝこて。その淺ふ徒ひるひゝゝゝ巴麻嶌を投ゝ漕ゝゝゝそのゝ夜変の比及ふ件の荒磯へ乗ゝゝゝ。元来紅ハ齎ゝゝゝ水もゝゝり。人住む浦ゆゝふとゝくハ岸ふのぼるも益なしとて。主従之人揖を枕ゆて。長ゝ夜をゝゝふゆゝ浪の音のゝ凄ゝゝ。睡ゝんとゝゝふいも寝ゝれぞ。やうやくに白ゝ漏る星の光りも落くゝりて。ちゝふ波の隙ゝりなりゆく隨ふ嶋山のゝゝふ笛の音嶋ゝゝえゝけて為朝枕を歌て。ゝゝハ人なゝ嶋ゝりとゝゆふ地の音れゝゝゝゝるゝゝゝゝ。ゝゝゝハ林太夫も耳を側ゝゝゝゝゝゝを

ちらばりて。ものひとつとなるこそものく。今より六七年のむかし。何処とも
さだめぬ孤ど。仙人の在とるとて。ときく人のいふるのひゝ。件の仙人
天よく晴くれる日ハ鶴ふ駕り。雲よけし。三十六の嶋くに。めぐりあるく
ゐんり。この嶋ぶ彼仙のさとをせうふ処ゆやあらんぞゐんさらぐかゐる
人嶋ふ翫水遊山とるりの。めるべくもそんいらぐとといふ為をてれを
ゆて。亦王女よりむりひ。いうゆもひとふゆゐんゐん瀛洲蓬莱ハ仙人の集會
ところとして。ゆゆくゐふゆもきるしくり。きうぶゐかくゐ孤岩ゐゐゐも仙
境ゐゐぶといひぐしり。値遇をゐるゆめぶハ縁ゐ破ぶゐゐ
ともかりねべし。いざ訪ぐやく宜へばゐくハもきるゐ行り。倶しゐの人
とてゐつともに潮水ふく激ぎ。鮮血ふ塗れる。上の衣ハ脱捨て。仙
ぐゐりハ袂襟しつ嶋長林をゐ弥をぐえて。弘をゐるゐ夫婦迷も

扶助られて巖ふ攜ひ岸ふ這のぼり。笛の音のをるかくゐとて面こ
ゐゐふ。天ハ既ゐ明をて旭海ゐりさし昇ふ隨ふ彼此をゐんゐりゐゐ。
沙頁ハ梅花の散るがごとく。松柏ハ龍蛇の蟠ゐゐ仙ハ浮世ふ遠き住
境ゐり彼流水ふ遡洄て。桃源ふ到りしも。かくやゐ学ぶゐしゐふ
何とゐく心清き體かゐして疲労を忘れ。足の運ハもゐくむゐぶ。
海山の麓ふ茅ふゐり。さる行ふ。笛の音ハいゐく近く聞えて。勿地山
本ゐる樹蔭ゐり。ひとりの童子。横笛吹をゐみ行り。出来ゐよ。大き
三歳駒ふ乗り白鹿ふ清水汲入れゐりとおぶゐ瓢二つを負し。時ゐゐぬ
桃の花を折添てゐり。為朝も王女もこハ仙童くとゐゐふゐふ。恭しく
むひをゐて。おいひかけんとしゐへハ童子ハ笛の音をとゐめて。莞爾
笑をゐ来ゐるり。為朝夫婦ゐゐぶやゐゐ。きのゐゐぶ師の寡

せしこゝ
あり。翌年大里按司八郎為朝その妻白縫王女と相ひて治平
ことあるべし汝ゆくべからず為朝ゆくゝび残兵を聚て曙雲式部滅
さんとすゝぶ直ふ姑巴嶋へ推渡りて。その人を索よ。こゝなれ翼ごとく
ゑじ。ちゝはあれと。今茲ハ為朝四十三歳。ちゝも絶命遊年ハ當れり。
その星ハ計都ふして。空亡在所巽の隅にあり。いまゝ冠式暫べゝ。
明年の春の季に至て。ゝゝ謀ふい大吉なり。按司功成り名遂て
の後。ゝれ必ゆきて相見ゆべし。今ゝゝ六年と孫ゝゝんあハ頭山の邊
ふ俟べし。と受えちゝせよ。と宣ひて。かくてゝゝ師ゝ鶴ゝゝ乘りて。
東海へ赴きゝひしゝきのゝの亭午ゝゝ。されがゝゝ師ゝゝの渡ふ
姉ゝゝゝ。按司ゝゝ舊の敵ふかゝりて。姑巴渡へ渡りたまハとゝふ。
為朝王女ゝ。いまゝ各告もめゝゝ。ゝゝしてちゝれゝあて。ゝゝふゝ驚嘆

ちて。ゝゝも疑ゝ。真仙の教諭謹でらけゝりゆゝね只道顔式
拜せゝれゝ恨ゝゝるのゝ抑ゝん身の師ゝゝゝふ真仙ハ往昔ゝ。
跡ゝゝの嶋ふゝゝゝゝる牧願ゝゝゝ道号ゝ告ゝゝゝゝゝゝゝ。
宜ゝハ童子微笑ゝゝ師のゝゝゝ忽卒ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
曉ゝゝゝゝゝゝ回答ゝ瓢ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝ為朝左右のゝゝふ受棒ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
童子ハ鹿ゝ牽いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
追ゝゝゝゝ。忽地ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
奇異のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
顔郁ゝゝ花。僅ゝハ英ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

さしこ。されがこととて。書を受載て。王女らもふこれをえらべ。
いかゝ人のためしも。ちひろの海ふことらふるの。誠をえらふ。
と隆文ふど印をうけ。為朝これを讀果てら驚て王女をえんかへ。
是ハ此保元のころ。伊豆の大嶋ふてつゞ派ぜしおなり。このおよつきてそ。
くさぐの扣がうあり。為朝配所ふありしとき往昔曾祖義家朝臣
金の牌ばけて放ちまひ。拾。忽然と飛去てつゞ傍よりこの鶴を
ちの已前。古院の仰よりて為朝潛ふこの國へ密来て王女ふ玉と換る
りのも。あるに彼拾ハ鳥羽院ふて放生行れらり。ゆえ。蒼海原ふ
凌ぎ来て。為朝ゞ謫居を訪ふて。ら。ちふ孫あれ似ら加之
彼金の牌の裏ふ。

眠柳閑花遶水亭　仙禽再去還東溟

逢春便覺孤霞迥　清影何時照我庭

と詩句をさへ字しら。ねんを誰とふ孫ども故ありねべくそふ遊ふ。
牌ふ水を沃だらけて。文字ふ紬へらしら。これも又柔兼ハ染く
この牌へ件の和歌を書ばけ。ふ。ふ再び空中ふ翔のぼり。雲と淚
ごそ流ぎらりぬ今ふ至て廿餘年。疑ひしらえて解ざりしふ。そらふ粤
にらゞ年の迹をこうるこて奇特なれ。是彼ら孫ども孫ふ孫ふ孫ふ孫ふ孫ふ
比ら。この嶋ふ往来しなれ依。孫の[illegible]名を仙客と唱へ又仙人の驥
なりといへが九皐に鳴て六ふ。
よしとしらべらゞこの短冊ふ白ら[illegible]ふて。さみゞら孫の君ら[illegible]ゞ羽ふ
ゞらかれべしこそひらけ絲と件の詩歌印ふ紬を嫁袋の底ふ
ふれて。ゞふ[illegible]ふ入れふ腰ふそふとなるしゞ。数箇度の窮難に

仙童寅吉
朝日

世に
く失ひつれど。曩ふ讃岐院の山陵ゑ通夜せしに夢の中ゑ感ぢ
ちられ父が紀念の宝劍と燧袋ハ今にあり。これも亦奇といつべし。これ
まくといひつけん。腰ゑ結ひ燧袋を掻拂ひ。單の袖を出しうゐくハ
王女ハ袖ふ印しうられ詩をえろ。和歌とえろ。かくまで奇しき地語
を目前しられ感報ふ。久後こののりてこれに曾祖義家
朝臣の賜ふて。且つぶ丈夫の忠孝を天神地祇氏の神ちら憐て。
後の栄とちぶしのふ例をひいづの海ゑとひし鳥の跡を今。
亦この嶋ふ殯ちる。ちも霊あり。君も信ありかく炎魅ある奇瑞
仕れば。とく姑巴嶋へ到らせえしとえまへべ。これもさいちふ
かし。誘まくとて為朝ハ先ゑ道といそじ。ゆづて海道ゑ向り
ちつふ林丈夫を忙しく。船をさしよして。為朝王女と扶乗しまづふ

のゆうと同ハ夫婦を満顔ふ笑ひ合ひて嶋山の麓ゑく。仙童ゑ向ハし
る。詩歌のつふとぶてちもなくけえちしまひしうゐ。林太夫ハ只管
ふ奇なれうと唱歎し。遂ふ纜を解捨て。姑巴嶋ハ投て。漕出
さんとする行ふ。ちは愛えたハ枝ゑ旬くれハ花酒一六ハ文香ハ
ちえて更ふ新ゑ咲るがごとく。二ツの含ハ忽然と開て。香氣に満ふ
いやきしうとこれも亦時ふ応りて。吉祥ふ付るのりと王女ともゑ林太夫
が壽河ゑまうせば。為朝ハ船ゑ乗なぶ。桃の枝をちの儘ふ浪打隆へ
楚と挿ちれり。曚雲ふうち勝て。中山。山南北の三者ハ掃除こと
あるば。この桃永く栄ふ色。と誓ひまひうり。これハゆやこの所。その
夕より。潮の退くこと數十町。大うゐハ磯となりて。彼桃手くに花開枝
ぶれはし。その長丈餘ふ及ぐりと。後ふいひりて伝へうと。

第五十八回

花鳥を射て神童兵を談ず
姑巴嶋ふ父子再會を

却説佳奇呂麻の嶋長林太夫ハ巴麻嶋の磯を漕出て只管船を走らしめ給ふ。水行の案内ハよく知つ西へ〳〵と漕る揖ふ舳よりも疾く走り忙の南よりゆる三ッの嶋あれや何処と問へハ東馬歯山西馬歯山亦西南にゑえ〳〵ゑれ姑米山と答まうしけり。さて中山を北よりて度那奇安根呢の嶋〳〵を浪の隙あぞ瞻ゑ中に小春の海の詩あて神の導く快船ハ瞬うちふ數十里を半日ら程に乘走りしその日の未下刻姑巴嶋の磯へ着にけり。こゝも人なれ為なれハ。磯の衛の友守ハりて岩うつ浪のおのづ〳〵ふるゝよしもあ〳〵孫ふ纜を投うて為朝王女と岸ふのぼやう〳〵船ハ繋ぎとめて林太夫も後ひきすゆるに。ちひの外なる小嶋あれど山ハ山花ありて疊ゑごとく造化の工致あ中〳〵ふ目馴ぬ鳥の声きけば耳あらゝまれ松の琴ひく潮と亦うちよるる波の鼓も忘るゝ腸と洗ふ佳境なり。されば主従足引の山ふ陟て溪ふ降りつけ入るゝ桃の林あり。四時をり〳〵ふ開うとむ〳〵〳〵花あり實あり含あり。香氣殊さらふ鼻を突て醉ゑ〳〵ごとく。醒るゝ〳〵ごとし。羽客道士の葬やあるとまうちうちはきのふ行ふ忽地瀆書の声〳〵きこゆ。されバこそとて主従二人点ぜあて樹の間より。つゝ〳〵と入れ〳〵ハ林の中ふ人影して。仙翁と仙童と只二人。花を焙く形ハ瘦て枯松のごとく。骨逞して壮士よ似うり。童子ハ髪ふ乱しゼ。年の齢ハ定うるゝ〳〵ふどその声ハ十あまり。三ッ三ッの上とゝ。

晴清く。眉秀屑朱ちて玲瓏たる。辯舌いとも爽なり。ものく木の
ふを綴りあして。肩と腰とふ纏ふ。海松のごくにかき垂たる
衣のしたその隙より見えれど。礼讓ふ真実ふて。童子と却
上座ふ石ふ凭をけ。翁ハ遥ふ下より。彼童子が扣流ふと敬ひ
冊きて耳を側をりく難問をれことあり。為朝ハなほおがくとく。
流書の声を孰聞て。ゆく怪こつ。王女の袂を引揺して。密中ふ
宜つやう。いかゆ今ふ不老長生を根として真を彼ー丹火煉ふ。
道書ふ学べ。をひけふ。彼処ふ流ひ兵書を。往昔ころ曾祖
義家朝臣。大江匡房卿より受伝ふ。訓閲虎之巻といふ兵学
の秘書ありて。源家の嫡子相兼して。只義朝これ義ひ。ちふ
平治の播乱ふ。義朝これを懐ふく東路ふ赴て。尾張ふ野間ふ

内海ふて。長田ふ誅れ。ひねと灰ふ化ふくのこその後ハ。彼書何人の手
ふ入りや。ちよしなけれどこの手来。いとくとくちふ。
童子ふ流書ときけば。彼と足と相似ふ。それ。ふふねる。とどうふ。耳語
ふをあとびやありけん。童子ハ一際声とたうし。蓋武羅ハ漢の樊噲
母の衣を得て。草の上ふ佩。忠孝の誓四海ふ漏れとしいふ。さるこそ
武羅ふ和合緒あり。忠禄の緒あり。長短みるに傳。そるごく十二
幅一尺上ふ。右の緒を帝釈と名ぢく。中を天上の緒と唱へ。左の
上の緒を頭神と名づく。中央ふ日月の二天子と表し。増長廣目。持国
多門の四天と添をりのこと。讀ぐ。翁傍よりこれを難じく。
母衣ハ樊噲ふ。母の衣を形ふりしよりそじまるといふ説ハ後て唐山の
書ふえ。これらの字ふつれて。説を設ふ。或ハいふ。母衣ふ

毛衣。鳥の羽をもてこれを織る。今の羽織といふ名目は原母衣より
出たり。これ矢を避ん為にして城攻のとき甲の上へ被ぐといへり。この説
いかがあらんと謂ば童子は莞然と笑て旧説かくの如しといへども
樊噲がごときは考る所なし。赤き鳥の羽をもて織するといふ説もあり
ゑらし。夫保侶衣は袋くろの義にてこれを負とき袋に似たり。三代実録
巻の十七清和天皇の貞観十二年三月十六日戊辰従五位下行対馬
嶋守小野朝臣春風起請の二箇事を進る。その一に曰軍旅之儲
介冑に在り。薄と雖助て以保侶を望請ふ。調布保侶衣千領を縫
造り以不虞に備んといへることあり。これは保衣は毛衣にあらず且往昔
より上古仮字をもて書事あり。母衣と書武羅と書。みな是仮字
なり。保保武羅五音相通にして別に故あるにはあらぬぞ。此戎具唐山
にはその名だになし。これ大日本の古実なりと弁舌滔々と答れば
為朝これを竊聞て只顧に感嘆し。後生畏るべしかかる小島に
神童ありて兵学既に古今に通ぜる奇なるかな妙なるかなと頻に称
讃すその人は王女も吾を撫たる夫婦面をあはしまふ彼処に翁と小
膝をさしよせ君が発明その説をうけたまはりぬ。これらは偏に穿鑿のこと
敵は拉ぐの術にはあらねども。水戦して水中に歿ふがいかにせんげに
そのとくには犀の法赤龍王の奇法ありこれらを豫て備ざるときは
よく水難を脱れるべし。むかしは往時その名を覚えし天智の御宇に
藤の千方赤周融院の御時に丹波千丈嶽に籠りし酒顛が類の魔縁
のものを輙く撃とる術いかがと問ば童子そのちちは点頭てそれらにもある
まで赤方便あり。鑪をもちて太刀の目を頻通さしてこれを佩。阿羅窒

都婆阿路帝那永莎賀と神呪を唱へ左へ雑て砂るとそれ変化と
いつても驚きうろぐし。ちうりといくども魔縁のものもそく隠ることあらべ
行太刀も亦目標を見んそのとてふこそ真言あれ弓顕覧吠吽
莎賀と五扁唱へ指左右よ相組ぐ。その間よりこれ
をつくれハ妖精変化も隠れ引ぐ。敵り大勢なれとそを鶴翼雁行
長蛇の陣時宜ホよりて布設一騎も漏さぐこれを撃勇猛の下弱
卒ホし或ハ孤雁出群勢或ハ烏龍翻江勢提槍騎馬勢披身撃
撃剣槍法勇を奮て堅を破て鋭を砕き立地ホ撃靡け敵の大将
射て落を前さきれハかくのごとけんといひけ雑て身ハ起し傍ホ
立ちれ弓に箭刈てきりくと弯固とび折しもあれ鳴烏の桃ホを銜
て空中高ハ翔揚れを。ゆりこして兵と射る。矢壹たびぐど諸羽ハ

孤雁出群
等ホ以下
国説弓録
ホ了えり

篠れて鳥と撲地と落ちうりとり為朝ハこの形勢ホ扇と用て声
まるく。射ちうくと誉る人ハ童子ホも翁も樹の蔭ホ人あることをば
てあれバうち驚きつ借とえて。ま中や船もかようね荒磯ホ扣の声
を聞へいと冴じ。何国の人。ぐくの浦より漂泊しまかを去ちく保
ぐも。人ぐ多しくそうぐ漢と晋とホ故事も。ゆまほしとひあれ
あるこへと。ぐじ入ちに主従三人忙しく。桃林の中へをみ入り。為朝
礼儀を正くして童子と翁ホうち数ひこれハ琉球山南省大里の
按司夫婦のものなり。近属逆臣利勇を誅し。亦妖賊曚雲と攻殺て
彷ホ乗るといくとも都遠ハ幻術ホ乗ちく。士卒盡く討死し。某
夫婦ハ辛ぐて必死を脱れて佳奇呂麻なれ由縁のものホ誘引を。
松山の海辺より。独木舟ホうち乗りて。ちうぶも巴麻嶋ホ向ひ

変化の術を神仙の教ゆゑんと更ふこの処へ来れり。願くは二位の仙君神変不測の眸をかへし。吾倚を助て曚雲を撥ず亡さし民の塗炭を救ひしなり。先王尚寧才浅く慮足らずして佞人を重用し。妖僧・蠱惑されて終に国家を喪ひ給へり。されば天孫氏の正統断絶せんと仰ぐ。されどもつゐに妻を尚寧王の嫡女なり。彼といひ是といひ義の仗ところ脱しがたく波濤をわけて仙境に推ふし志願を告て神助を祈る偏に海容ありたまへと叮嚀に述べ人。童子に公羽を乞かつて。この処を琉球国。三十六嶋の内なりと。波がいひはれど船もかよわぬ。浮世ふ遠ち嶋守ハさるゐありともちふざりたといと外ふしくりのもろに翁ハ応じ給ふ回答ぞ。為朝をうちまもり。赤ら日鑿て赤世なれ眼底に涙を含ミ別れをりてより。僅七年にさぶれども。

主も亦隷も潮風に吹ふつまれて汚れ垢づき。木の葉を衣とし海帯を帯とし山の猿ゐもいやはて昔の姿もなくなりぬれば面忘れるふるふ人。いふ吾君御曹司。八町礫の紀平治ふゐりのをと名告もあくと童子ハ引て弓と捨。さてハこの賓客を父君よりも世舞天丸ゆゑかと携りまつらふるも同じきるも先ぶろへ涙の磯の洗ひ松。根ハあらわれて哀れ多。為朝も又王女も。ひとうけ極べ喜しさのあまれ袂ふもく寄の命ゆり時ありて。ぬくとび相見て。つぐ子の顔へふりかゝは額髪と掻あげて嘆息し。亦紀平治とゐかりつ寝れの寝ぶ八町礫ちりのゐはて老ふる。こゐ舞天丸ゆゑあるゐれよ。叔も大きくなりぬるゐ。これハ夢ゆゑあふざれ欲。也爰なるふバ見ぞもあれ。つぐとるゐも駿あり。

桃源ハ神仙
父子と
貧く

苦しかりしの恩愛の迷ひかこそと弓矢をけてこころ引えて。
袖のあやれを志しバ又哀欲涙を流ぶ。あふれてこれをえられな
らふも王女ハ頭を搖ゐ。長林太夫ハ蓍て只よゝとのミ泣
たまへバ林たまゝ何の故とも。ひうけ孫ど哀れさのこれもやく紀
ゆら時雨志ゞし傘借を公持せう。かゝし行くよ紀平治ハ隨て涙成
かれ拂ひ。まづ何ようまうゐべき。今茲よりハ七年山ゐ安元二年
仲秋十六日の風流れて稚君の御舟碎け。高間磯萩ホをけゞ
志て後者ハ悉く波の底ふ入りにられと紀平治ハ稚君成左まふ
くさし揚ゝ。折かゝる浪を袖ともせど且く泳ぎ。ようべ成も
あふ潮ふ搖あげられ引もゝされ力哀へ勢ひ竭て今ハかうとおりふ
折ゝら大魚の背ふ助乘せられ。其処ともきゝぶ。この嶋へ
ゐて。のひきこられハ高間磯萩が亡魂大魚ふ憑て稚君を救ひまゐし
ゝれ。と後ふ思ひあはせるゆゑあり。かく辛じくこの磯へ流ぶ
稚君そ。いの紅ゆゝ緯紐とて。ほゞ久せどもそのひゐ悲しくも
又朽をしハ懇ふ青海原を凌ぐてこゝふ漂ひ来ども紀平治ひとり
存命て何うせんと躊躇ー。注ようゝ外ふとゞもなけれバ腹ゝ成きん
とゐふ折ゝら。とゝふゞも神仙の宜助ふよりて立地ふ稚君蘇生ゐ
けり。加之件の真仙。この嶋を稚君よゐるし。剣源家相伝の秘書
訓閲鬼之巻を伝受ー。この書久しく編蓬の中ふあしどゝれこの子
の為ふ終めゝり。これハ為朝ふ由縁あ成りのゞ。汝紀平治勉て舜天
丸をゐり育武術文学を習ハせよ。亦箇様ゝゝの袖をりゝ弓成
造り心放ゆゐ時をまゝこバ後に用成形あん親子の再會疑ふ

ぞうふぞ。これいろあうり他し嶋へうけるべ。仰もめくさ空中ふのわり
ゑ了。今さうおりへハ彼真仙ハ巴麻嶋ふ迹をとゞゑ亦大殿を建すき
て。あの嶋へ去ゑふり。おりゑふそ北。この桃林の中ふおいて大き
ゆなる羽の羽と。金の牌を拾ひ得ゑり。この牌ハ康平年間。八幡
太郎義家朝臣戦の時ふ放ゑひしとゑ鳥の足ふ著ゑくゑりの事
よしハ聞るしゑゑ。文字あてくやきれば。ゆゞて真仙の教ふ。うて羽の
をりて征矢を刻。鹿の角をりて鏑とし。第一の矢を伊勢白王大神宮
と祝い祀て。第二の矢を八幡太神宮とし。第三の矢を阿蘇の明神
として。主従祈念懈らぞ。亦この林ゑ東へ指ゑれ桃の枝を折りて
弓とし。藤蔓を弦ゑて或ハ野駒大鹿ゑんどふ木の皮絹
あいしゑるとゑ編ゑりて。稚君ふ騎射遠射を習ゑ。ゑゑ。亦

あるとゑハ。砂ふ跡つけてゑゑ。ゑゑ。聰明睿智傳ゑ。未見の
書籍をよく諳文武の両道を極めゑ。紀平治ゑどゑ所ふ及ぶ所ふあゑ。
その怜悧をゑなれバ。主従二人ゑゑ。嶋ゑとなるゑハ憂ゑゑ。
いろの花ゑゑ大殿ふ稚君を遍ゑ。よくもそゑゑし養育ゑ。
只一言の仰をきゑゑ習をもゑゑ。立地ふ命ゑるとも恨をあゑ。
とゑゑ。きのふなゑゑ四時ふ花さゑ子ふ結ぶ桃ふゆゑ。
繁ゑゑ老ゑ玉の緒長ゑれと忠義の為ふ惜む果敢ゑさえ賢
ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。
と一五一十を物ゑれ。儔罕なる忠臣のゑゑにありとゑ。
濱の生の砂子ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。
為朝ハ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。ゑゑ。

字留とれ。衣の袖をさり出して。その来歴を詠ちじ。今紀平治がい
ふよ〳〵これと符合せり。彼神仙いうなれば故ゆえ。か〳〵為朝と憐ふ
や。縁故ハ曉りさけれど。そのよし好くいあるべうに。それのこゝろ〳〵。巴麻
嶋ゆえ仙童ゝ。そもじ〳〵。桃の小枝の八ッの花。六ッハ凋こ二ッ。ゝ合ゝね。
ちうはふその花ゝるうちふ。紫色香をはしいづれも新ふ開くゝ。ゝとれ
をこの嶋ふ来てとじめて曉る。一且凋〳〵六英の花ゝ為朝夫婦林太夫。
松壽鶴亀ホがうゝふ象り。二ッの花ハ舜天丸と紀平治ふ象れり。只惜
むべきのハ高間太郎磯萩のをかれば松寿鶴亀ホに再會せんも
疑ひなしとて。それぞれがうゝさゝ。此〳〵のゆりゝと告るゝ。紀平治
も舜天丸と面をあはして掲焉たる奇瑞を感佩ちうしが。ホ淫くとうち
ちをれ。身方の徒を足彼と。数へるゝど白縫も。吾妹子ともいひ出るゝど。

などて徒ひのハざれと。同ハ亦舜天丸も母君何処ホ在と。琉球王の
長女をりて。後妻ホせしと宜へハ。母君を世ハ去りたまふ。飽迄て
別〳〵契ホあるじ。そもじ〳〵とうかゝし。同れ〳〵父の胸苦しさ。同ハ
子ようなほいやませば。回答ゝ称つゝ〳〵。ゝ〳〵。うち点ハて嘆息。
往ホ肥の國を出しとゝ。それもその日の風難ホ脱ゝ。ゝ〳〵しゝば
白縫も往古の芽橋姫ホ為と比〳〵て涙を披きて水屑とゆりねゝ。ゝれ
ども風波ゆゑ止まゝと。ゝ〳〵ハ怨地反覆ゝ。後ハ壮士數十人。おのゝく魚
腹ホ葬られ。ゝ〳〵に至て為朝も。死ゝぐるしとおもけるゝも。瀆岐院
の神霊の擁護ホよりて琉球の屬嶋ホ佳奇呂麻ホ漂泊て彼國
の。逆乱を伏〳〵に忍びも小琉球の嶋北ホて。寧王女の必死と救ひ。王子
ホ渇〳〵てゝ〳〵ぶも。大里の按司ホ封ぜられ。内外なる婚縁も。固辞

にはしめて王女を娶り。駿の手を携へられしも。こそ住ねこのところも。
琉球國の屬島なれバ。つる子ハさらにありけれども。おのれ縁ハ訪ひ
もせまど訪れもせまど時しありて。父子再會の情を述。これこそ源家を
護らせ玉ふ神明仏陀の冥助ハさらなり。又紀平治が忠義によれバこそ
歎きあひそと慰めの人バ。舜天丸を。つくづくとうち守て泣じとされど
鬢もむれ。蔽衣の袖のいと怪しく別きなりしハつらき事なり。六ッ
七ッの秋なれバおん顔定かならねど。凡生と活る物。父あれバかならず
母あり。毎年にこの嶋山の松に生育鷲ぶらも巣こもる時ハ父母ぞ。
慕らて鳴くふいてつれ。父をも認らバ母とも認らず。此処の海の
吹荒まて。ころ〳〵かよふ磯衛も友呼うに呼ぶものを。親とも友とも。
家隷どもえあれバ八町礫のこ頼む所ハ神仙の導きまひて一トたびを。

父か母かもおなじあらめそれハ泥と果しなれ。澳を眺めて立わるぞ
朝日の影もつゞ國の天なつかしく伏拝む神も仏も親の為命ながられ
黒なく世おし在せと祈ける。神の恵ハありながら母かへ絶てあらよし
すげふるハさらに歎びの中に歎れと倍んされころ紀紫ハ何処ぞや
波間を披れて入りますときけバ今更朝夕に目馴れし海もなつかし
きて。樹の間遠く伸あがり伸ながれども潮けぶり。雲に挾霧に隔られ
とかくねもりひを喞ち給へバ。為朝もつゞ子のこゝろ。さこそあらめと
推量ながらやよ舜天丸。悲歎をいと理なれど。母なしとて歎くべからずぞ。
白縫え事ありしならの夫の為子の為に。曩に王女の危窮を救ひて。
魂これに憑うつり。みづからハ白縫王女と稱ぞ。これ浮たる説にあらず
ぞ。されバ面影こそ世異なれ。そのいひきるゝ勇敢智慮を。白縫に

雪とぐるこゝろし。これをおん身が母こゝに王女いなどてこのいひ
ぶいね。日素雄くゝしおさりげ形く。泣のこ母の情るゝんやいひひ。
と激されて忍びう泣つゝ轉輾び。一声高くよゝと泣。あれや実のゝ母
の。声かときけば舜天丸。王女ふ犇と摟りつゝ尸を浪れ朽ゝまふ
ども魂魄この土ふとゞまりて。由緒ある人の體を借て。父の後妻と
なりまゝ人バさてもかくてもつゝ母なり。ゝぞや只一言と惜こゝまもく
舜天丸とも。つゝ子ともゝ忍れいのねこの嶋山を数なゝゞ。おゞゝくと
惜ふ遠き海より添き産の恩。まゞ一ヶ日の孝もはくさゞ。大嶋る在
ときく兄君のゝ。尾張なる姫君のゝ。下野なる朝稚君ハつゝ身
ゝゞ西も東も。ちゝざゝしとして仮初ふ面あしたるゞゝんもおゞ
えゞ。兄弟黙あり形ゝ。形なき世のたゞそゝひ。ちゝゞちゝまね

舜天丸ゞ。ゝゝ涙を哀れと閔さゞば母ゝと名告ゞ。ゝゝ。と嘶くゞ
更ふ咽ふ袂をおゞく引揺さゝ。ゝゝ抱たゝ。おん身ゞ
恨ハ理なれゞ。ゝゝ母と名告ゞば。面影認る紀年治ゞ。
実とせゞして疑ひの。ゝゝもなゝゝとおりふゝら只涙のゝゝ
落ていふべゝもいハざりゝ。ゝも寧王女ゝのはゞゝ。おん身ゝ
父の宗ゝ。ゝゝをりて玉ふ摟ゝゝ。由縁もあれゞ魂ゝ憑ゝゝ
ちゝゝや。ちゝ種ゞ。ゝゝゝゝの上ふ顕ゝて。良人ふ奇眉ゝゝ
親子ハ原是一世の契り。人死ゝて異ゝなれハ過去ハ未際とゝ
いゝゞ子ゝ名の間ゝ生ゝうえても迷ひくゝゝふあゝゝちゝゞ。
良人ふ子ゝも黙ゝりゝゝ。ゝゝるほゞくゝにゝ新ゞ。ゝゝ人ふ
福なゝ。ゝ大嶋ゝて自殺せゝと。後ふ父ゝる忍郎為頼。ゝゝ又ゝゝ

腹なりし舜天丸ふさぐえとうり。世ふあぶ年ハ幾許かごろの
衣笠りやさそれとてご子ふ等しれ年庚の童ご腰の種あげも仏
ふかくれ綻びの長ハ別ま丹短夜ハ。孫ぶ〻ごあうとこと多かり。
かくまでめくぐれ物おりふ毋ご歎ハ人ちふね。荒磯ふひとりちを
冊く。紀平治ご千辛万苦におりひ比まば數なくふ。その丹誠の
かひありてげふ旃檀ま二葉より。芳〻くあて裏木ふ揚れ雲鳳
ま卵の中より。その声諸鳥に秀とい人迹絶〻れ島ふ生
育兵学弓馬ま遠祖頼義朝臣ふとさく苏らね
もん身ご本事。この父ふ〻ハいの子なり。曚雲と滅をりのハ舜天丸
なくぶ。そも誰ま や武運ハ父ふも母ふも似ま久後ぶぐ芭蕉布
の糸の乱ま とうちおまえ話の羽衣清潔く。浮世の民ま掩ひたく。

亀の齢八十あまて。あハして曾孫玄孫の。ほろ後まぐ栄ま。
祝詞げどふはくき木の。拭ひあくねま涙ぶり。舜天丸ハ今さくた。
いとぐ雪げた言の葉ふ濡れくれ袖ぶたあハ。ぐ〻ハ高た母の恩。
ぬくぶ物いひまくしたまふ歌びこれふまとことゐ。涙をおまちぶ
かーと慰めめ人ハ紀平治ハ小膳を拍て感嘆し寔ふ王女のあん言舌
白種姫ふ異ぶくぶ。面新さ人ふ似ーくぶり。ありくハ七年前の秋。一旦死
しくれ親子主従ひとつふ聚れてこの嶋ハ冥土黄泉の街なくぶ長生
不老の門なりと祝〻まうせぶ林太ま。千秋萬歳と稱ろ。舜天丸
そこれとえて。倶〻たまへれふ誰ぶくん。と問せまくハ為朝ハうち烏帽
て嶋長とはとり近く招れよ。ふれハ佳奇呂麻の嶋長ふ林太夫と
呼ぶくりのなり。じめ為朝彼島へ漂泊〻て嶋人ふ信せくれの

後王女も浦長が家にかくれて曙雲が残毒を避けることあり。彼曙雲
といふものハ此くの癖者なり。亦大臣利勇が奸悪松壽夫婦。浦亀
親子が忠孝を後世まで為朝が一昨の敗軍に相
従ふ士卒もなく。夫婦ばかりを索めひて通宵道を走り。身もいとさう
餓疲れて松山の磯に立在賊兵ハ追ひ来れども御ぶぐよ
術なく。進退既に究まれ折ふし。讃岐院の神夢告げ給せ給ふこと
ありとて。この嶋長が豫てより。船を件の磯ふよりて。これを俟られが
ふ以後ハ窮難を脱れ。のこなりぬ。父子面わらとれとを招
う。是併讃岐院の神助にして。又浦長が忠義を賞し。と稱する人で
舜天丸ハ。紀平治りうとも感激し。神助と人の誠をもるかきりなし
福なりとて。叮嚀に敬び拜えの人ハ。林を走ハおそるく。頭を擡て。

さていふ事。漢を礼ぶく。小國の蔭を蒙る。荒磯に人となりてりへべ
生れ〳〵にて。為朝の孫と按司王女のおん為ハ命をしかくに
とこそ思ひなれ。されバ為朝なれおのが名ハ。滅をおのづから滅ふ
名将勇婦に値遇しまり。かくれ圓居に代ること。身ひとつ
ふ嶋の光を生とべくいと信ぶ。もて回答ふ。さる程に紀平治を
枝ふ。なれ桃の子と。六ッ七ッうち兼して為朝玉女ふ。まもるし。
林太夫ふ。これをとふしつ。そのとき為朝ハ石瀧まで漱ぎ。彼桃代
りて。こ社の神と祀て。ちゞ心中の所願ハ念じ。舜天丸ふ宮ふ
ぬう。桃ハ邪鬼を除くりのこ。その神代の巻ふ。もて。亦風俗通ふ
ありとりいて。えつべ〳〵ふ徒ふる桃ふ由て福を招けるゆ。これ曙雲と
滅この前象なり。且この嶋ふ伊勢。男山阿蘇の三社の神を祀りしし

と究めてよし惜かるおん身いまぞその舊をしらんぞ。夫烏ハ熊野權現
の使者なり。されバ神武天皇の官軍。山路に迷入りしとき天照皇太神。
八咫烏をもて官軍を嚮導せしめ給へることあり。その太神を祀るなるに。
なぞや一隻の雛を惜みて烏を射て落しつる。いと不覺也と諭し給へバ。
舜天丸謹てうけたまはり仰寔にさることなり雛をもて糧とせれバ七
年が間この嶋にて無益の殺生し侍らざりき。父母のおん為と思ひ奉り
侍るなれ。されバ烏を射よりといへども。諸羽を縫ふて傷けず且くこれを
懲せしのみ。今ハ放ちやるべしと回答つ。落たる烏を引起し箭を拔給へバ。
羽ぶきして阿と鳴ながらおのが棲む山路遙に飛さりゆく。烏を衆皆目
送りて舌を卷き頭を傾け。百歩の外に柳の葉を穿つといふ養由基
も。これにハいかでまさるべきと。稱讃されバ為朝もいとゞほることの純しく。

そも〳〵舜天丸微妙なりける弓箭もて國を治んものハかくこそあれと只
一言。父の賞美ハ身にあまりぬ。舜天丸より後は紀平治も身の幅
廣くおもふなるべし。かくて親子主從ハ苑を席に團坐して。七年以來
の艱難憂苦琉球亂離の一條を。いと長々かたらひけるに。初冬
なれバはや夕ぐれて。えしふかゝらぬ月影も。燈燭をそへるに似たり。
至誠ハ實に神の如し。一旦零落したまへども。求めずして洪福あり。
為朝の子孫王となり。武將となりしもうべなるかなや。

椿説弓張月拾遺篇下帙巻之一畢